

青年期の「ナナメの関係」に関する研究

居場所づくりの実践から見えてきたもの

Diagonal Dyadic ('Naname') Relationships during Adolescence

枝廣 和憲

EDAHIRO Kazunori

立命館大学産業社会学部小学校教員養成課程サポートセンター

(College of Social Sciences, Ritsumeikan University)

key words: 斜めの関係, 居場所, 友人関係

目的

「居場所」という言葉は1980年代から不登校という現象に附随して、使われるようになり、これまでに様々な研究がなされてきている。住田(2003)は客観的要素として関係性をあげており、筆者の居場所づくり実践におけるエスノグラフィの結果、中高大生の中立的な異年齢の友人的関係が構成要素として抽出され、これを「ナナメの関係」と命名した(枝廣,2005)。

笠原(1977)が「唯一の」治療的通路は、上下的タテ軸的、直系的な関係から離れた「中立的関係」としての、(タテでもヨコでもない)「斜めの関係」である”としており、豊島(2004)が笠原の[斜めの関係 = 叔父 甥(叔母 姪)的關係]を地位標高差の視点から捉えなおし、概念の理論的再考を試みている。

友人関係に関する研究では、異質性のある友人を持つようになり、友人関係が拡大するとされている(榎本,2003; 岡田,1993など)。異質性である異年齢の友人的関係も存在しうると推測される。従来の研究では友人を同年輩に限定しており、異年齢の友人を扱ったものはない。

本研究では、「ナナメの関係」が一般的な交友関係に存在するのかを探索的に確認することを目的とする。今後、この調査で確認される「ナナメの関係」が与える心理的影響を明らかにし、臨床的援助視座を提供したい。

方法

A 高等学校生徒を対象に質問紙調査を行い、251名(男性92名,女性159名,平均16.7歳, $SD = .96$)の有効回答を得た。回答は友人の属性(年齢/性別/学内外)の12分類毎の人数を尋ねた。分散分析により、性差、学年差を検討した。

結果

約60%が1~2歳年上/学内/同性の友人を、約40%が1~2歳年上/学内/異性の友人を持つことが明らかにされた。約50%が1~2歳年上/

学外/同性の友人を、約60%の高校生が1~2歳年上/学外/異性の友人を持つことが明らかにされた。3~5歳年上について、約50%が同性友人を、約30%が異性友人を持つことが明らかにされた。6歳以上年上について約40%が同性友人を、約30%が異性を持つことが明らかにされた。

分類毎の友人数を学年と性別で交互作用はなく、各々1要因の分散分析を行った。1~2歳年上/学外/同性、1~2歳年上/学外/異性、性別の有意な主効果が認められた($F(1, 249) = 4.36, p < .01$; $F(1, 249) = -4.50, p < .01$)。6歳以上年上/同性、6歳以上年上/異性で有意な学年の主効果が認められた($F(2, 249) = 4.80, p < .01$; $F(2, 249) = 3.55, p < .05$ (多重比較 1年生 > 3年生))

考察

6割の高校生が「1~2歳年上」の友人を持っているという結果により、[異年齢の友人的関係 = ナナメの関係]が存在することが確認された。性差(男性 < 女性)はジェンダーの影響が考えられ、6歳以上年上友人の学年差(3年生 < 1年生)は、高校生と大学生 < 高校生と社会人という環境的な要因が影響したと推察される。

展望

臨床的研究として中高生と大学生サポーターの関係を扱ったものがあり、一般にナナメの関係を持つことが示された結果をもとに、ナナメの關係の心的側面への影響について実証的研究を行い、明らかにする必要がある。特に可能自己としての側面から時間的展望や自我発達に及ぼす影響を検討していく。

文献

- 枝廣和憲(2005). 居場所の構築 立命館大学卒業論文
笠原嘉(1977). 青年期 中公新書
住田正樹・南博文共編(2003). 子どもたちの「居場所」と対人世界の現在 九州大学出版会
豊嶋秋彦(2004)教員養成学の構造からみた不登校生のサポートと「斜めの関係」-対人専門職-の社会化研究の実践的理論的意味-弘前大学教育学部紀要